



1000年後の命を守りたい

宮城・女川 震災教訓刻んだ「いのちの石碑」

実行委・鈴木さん 「1000万円募金集め建立」

【2年佐藤ひかり・鳥飼日和・藤枝慎之輔】

「1000年後の命を守っていくための活動です」

旧女川中に移動し、いのちの石碑を前に鈴木さんは実行委の取り組みを語った。震災直後は小学6年生、直後に入学した女川中の同級生らとともに、2012

13年11月1日募金が完成。女川町内の全21行政区に、

順次石碑が設置されました。石碑には、「もし、大きな地震が来たら、この石碑よりも上へ逃げてください。逃げない人がいても、無理やりにも連れ出してください」という言葉を入れました。

シーパルピア女川運営団体代表・阿部さん

面白い人集まる街に

【2年佐藤叶那・柳沼和奏・渡邊みいな】

JR女川駅前に整備された商店街「シーパルピア女川」。美しい海をコンセプトに、レンガ道に店舗が並んでいます。この商店街は海を見ながら集い、にぎわうことができる町の拠点となっています。

シーパルピアを運営する女川みらい創造代表の阿部喜英さんは、女川を「面白い人が集まる街にしたい」

と話します。女川町は東日本大震災で大きな被害を受けました。宮城県内で最も高い14.8メートルの津波が押し寄せ、死者・行方不明者は827人。町を出ることを考えた人々が集まる街にしたい。



震災後、官民一体で迅速に進められた女川町の復興について説明する阿部さん

「建物が増えるだけでは復興ではない。これから女川を魅力ある街に発展させていくことが大切」と阿部さんは今後の展望を語り、女川ファンを増やし、女川に行きたい、女川の人たちと関わりたい、そういう人を増やす取り組みをこれからも続けていきます。

実行委では、震災の記憶を後世に伝えるための「いのちの石碑」の制作など、さまざまな活動にも取り組んでいます。



「大きな津波が来たとしても、被害を受ける人を一人でも少なくしたい。そして、残りの990年、みんな命を守ってほしい」と強く語りました。

「建物が増えるだけでは復興ではない。これから女川を魅力ある街に発展させていくことが大切」と阿部さんは今後の展望を語り、女川ファンを増やし、女川に行きたい、女川の人たちと関わりたい、そういう人を増やす取り組みをこれからも続けていきます。



小売店や飲食店が入居するシーパルピア女川などがにぎわいを創出する



スペインタイル制作に取り組みきつかけとなった出来事を語る阿部さん

【2年天野友里恵・伊勢智大・笠原梨那】

11年3月11日、状況は一変しました。息は流れ、サークル仲間の一人を失いました。「色を失った町全てが壊滅状態で、どこに目も向けていか分らない」と阿部さんは当時を振り返ります。

震災から半年、ようやく生活が落ち着いてきました。サークル仲間と再会し、陶芸をまたやりたいという気持ちが生えました。縁

あつて窯を寄付してもらい、町内のイベントで陶芸のワークショップを開くなど、活動を再開。その後、民間でまちづくりをする団体から「スペインのカリシア地方と異文化交流をしないか」という提案を受けました。これがスペインタイルとの出会い。ガリシア地方で根付くタイルを勉強し、新しい女川の土産品をつくりたいというこ

「その後、国の助成金を活用し、東京の学校でスペインタイルの勉強に励みまし。そしてスペインを訪れるチャンスが巡ってきました。出発日は2012年3月11日。この日に女川を離れていのかと悩んだが、友人の勧めもあり、スペイン行きを決めました。色鮮やかなタイルであふ

聞いて！ 知って！ 同世代へのメッセージ

不安な気持ち今も心に 天野 友里恵 2年
震災直後は3歳でしたが、地震の揺れの衝撃や不安な気持ちを今でもはっきりと覚えています。その後も、大きく揺れるものを見ると恐怖を感じてしまうようになり、今も心に傷を抱えている人が少なからずいると思います。

津波の破壊力まざまざ 伊勢 智大 2年
女川については被災地、ということぐらいしか知りませんでした。初めはきれいな街並みやお話を聞いた方たちの生き生きとした表情が印象的で、本当に津波がこの街を襲ったのか信じられませんでした。でも、当時のままの真横に容赦なく倒された旧

諦めず歩む女川に感動 笠原 梨那 2年
女川取材で印象的だったのは、女川の人たちの前向きな気持ちです。私が大切なものを失ってしまったら、絶望してしまうと思います。しかし、取材を通じて「何もなくなってしまうから生み出せばいい。作ればいい。ここからでも、前を向けばいい」

伝承への強い思い実感 佐藤 叶那 2年
私は、今回「今できることプロジェクト」に参加して、色々なことを学びました。震災遺構として残る旧女川交番では、杭がむき出しになっている様子を目の当たりにしました。映像などではなく、実際に見て初めて被害の大きさを実感できました。

前向き人々の姿印象的 佐藤 ひかり 2年
私は、女川の方たちが、被災した大変な状況でも、町のことを考えて前向きに行動していたことが印象に残りました。1000年先の人の命を守るために建てたいのちの石碑や、街を明るく彩るためのスペインタイル、海に見える街をつくり上げたことな

自分ができること模索 鳥飼 日和 2年
私はドライブ好きの父に連れられて、女川をはじめ被災地を何度か訪れたことがあります。被災した建物や被害状況の動画や写真を見て、家の再建は大変だろうとか、自分が被災したら何もうまくいかないだろうな、と悩んでいました。ですが今回取材した方々の話

被災者の思い伝わった 藤枝 慎之輔 2年
私は、東日本大震災の時は2歳でした。地震が起きたときはお屋敷中、何も覚えていません。ですが、家族と震災遺構の大川小学校を訪れたり、防潮堤を見に行ったりするなど、震災について学ぶ機会はありました。今回の視察で女川の方から

行動することこそ大切 柳沼 和奏 2年
私はいのちの石碑実行委員会の活動を通して、行動することの大切さを感じました。実行委の鈴木智博さんは震災直後、自分とほぼ同年齢で、未来の命を守るため、同級生たちと女川町の全21行政区に石碑を建てようとして立ち上がりまし

息のむ旧女川交番の姿 渡邊 みいな 2年
女川を訪れた第一印象は「きれいな町」でした。どのお店を見ても震災の被害などなかったようでした。ですが、旧女川交番の建物や横倒しになった、当時のままの柱や割れた窓に、思わず息のみました。東京に住んでいた震災当時の記憶は曖昧です